

# Newsletter



Institute for International Monetary Affairs  
公益財団法人 国際通貨研究所

## 書評：負債論—貨幣と暴力の 5000 年

公益財団法人 国際通貨研究所  
経済調査部 上席研究員  
森川 央  
[morikawa@iima.or.jp](mailto:morikawa@iima.or.jp)

本文だけで 600 頁にも及ぶデヴィット・グレーバーの大著「負債論—貨幣と暴力の 5000 年」(以文社、2016 年)は、刺激に満ちている。ウォールストリート占拠運動に参加するなど、ラディカルな活動家としても知られているグレーバーは人類学者であり、本書は人類学者によるユニークな貨幣論である。

グレーバーの博覧強記ぶりは規格外で、話題は人類学、民俗学、経済史、各地の哲学や宗教史、日本の古典文学にまで及ぶ。本稿は広範な話題の中から、報告者が理解でき、斬新と感じたことをいくつか紹介するものである。

### 1. 欲望の二重一致は必要なかった。貨幣発生 of 神話を覆す

#### 第 2 章 物々交換の神話

貨幣論や金融論の冒頭には必ずといっていいほど、物々交換の話が出てくる。代表的には以下のような話である。

ヘンリーは芋を持っているが、今は靴が必要だ。同じ村のジョシュアは靴を余分にもっているが、ちょうど芋が欲しい。欲しいものがちょうど重なったので、物々交換が成立し二人は満足だった。

だが、翌月には困ったことが起きた。ヘンリーはまた靴が欲しかったが、今度は芋が

ない。ジョシュアは引き続き芋が欲しい。二人は困ったが、たまたま先週から村に貨幣が導入されていたのが幸いした。ヘンリーは手元の売れそうなものを売って、貨幣を得てから、それでジョシュアの靴を買った。

グレーバーは、この物語を経済システムの創設神話に過ぎないと一蹴する。そして「悩ましいのはそのようなことが実際に起こったという証拠がないことであり、むしろそんなことが起こっていないことの方を膨大な量の証拠は示している」(p 45)と指摘する。

アダム・スミスは、物語の舞台を北米の先住民族に設定したが、後の文化人類学者の調査では「だれも矢じりを肉の塊と交換することなどしていなかった」(p 45)というのである。

もちろん、物々交換の例が皆無なのではない。だが、日常的に村落内、部族内で物々交換をしている例は見当たらないのである。では、どのような取引が一般的だったのか。人類学者らの調査を元に、グレーバーは、ヘンリーとジョシュアの話を下のように創作する。

「ヘンリーが必要としていたのは靴であったがもっていたのは芋だけだった。ジョシュアは靴をよけいにもっていたが、芋はぜんぜんいらなかった。貨幣はまだ発明されていなかったのだから、彼らは困っていた。どうすればよいのか？(p 53)

<中略>

ヘンリーがジョシュアに近づいて、「いい靴じゃないか！」という。

ジョシュアは「ああ、たいしたものじゃないよ。でも気に入ったのなら、ぜひどうぞ。」

ヘンリーは靴をもらう。

ヘンリーの芋は話題にのぼらない。なぜなら、ジョシュアが芋を必要としたときヘンリーがそれをくれるであろうことは、どちらにとってもいわずもがなだからである。(p 54)

ここでの含意は、「ヘンリーは今ジョシュアが欲しがっている物をもっていない。だが、隣人同士ならお互い様なので、貸し借りが発生することで、必要なものを都度融通するという暗黙の合意が成立している」ということである。つまり「欲望の二重一致」問題はそもそも存在しなかった。そのため欲望の二重一致問題を回避するために貨幣を発明する必要などなかったのである。グレーバーによれば、貸借、負債は貨幣と同時に発生しており、貨幣が信用の発生に先行したのではない。

このことは、貨幣発達の下のような神話を覆す。その神話とは、物々交換の不便から希少な財を貨幣として使用し始め、やがて貴金属が貨幣の地位を独占するが、信用貨幣へ

発達しつつには仮想通貨が生まれるという、単線的な貨幣発達史観である。

古代メソポタミアの粘土版には活発な貸借の記録が残っており、5000年前から借用証書が存在したことが分かっている。銀貨幣として機能していたことが分かる。シュメール人の計算単位は銀だったが、銀貨の鑄造はされていなかった。神殿に蓄積された銀で価格表示された借用証書を、大麦や羊や家具で人々は決済していた。神殿は巨大な産業機構だったので利用法のないものなどなく、多種多彩な商品が流通していたからだ。

商人の中には銀で決済するものもいたが、「地元の居酒屋からビールを買うような一般の人びとは、やはりここでもツケで飲んで、それから収穫期に大麦だったりあるいは手元にあるものをかき集めて支払っていた」(p 62) のである。

グレーバーは強調している。「物々交換からはじまって、貨幣が発見され、そのあとで次第に信用システムが発展したわけではない。事態の進行はまったく逆方向だったのである。わたしたちがいま仮想貨幣と呼んでいるものこそ、最初にあらわれたのだ。硬貨の出現はそれよりはるかにあとであって、その使用は不均等にしか拡大せず、信用システムに完全にとってかわるにはいたらなかった。」(p 63)

## 2. 貨幣はモノではなく計算手段である。貨幣信用理論の解説

### 第3章 原初的負債

貨幣が物々交換の中から生まれたのでなければ貨幣とは何か。「貨幣信用理論」を提唱したミッチェル・イネスは、貨幣はモノではなく計算単位にすぎないとみる。ではそれは何を測定する尺度なのか？負債（貸借）を測定するための尺度である。

「一枚の硬貨とは実質的に借用証書（IOU）なのである。世間一般の通念では、銀行券とは一定の金額の、（金であれ銀であれ、なんであれ）『実質貨幣』による支払いの約束であり、約束であるべきである。それに対して、信用論者にとっては、銀行券とは金1オンスと等価値であるなにもものかを支払う約束に過ぎない。貨幣とは常にそれだけのものなのだ、と主張する。

この意味で、1ドル銀貨、<中略>ジョージ・ワシントンの肖像が印刷されている緑色の紙切れ、どこかの銀行のコンピュータ上のデジタル・ブリップ——これらのあいだに、根本的な違いは存在しない。一片の金が借用証書にすぎないという考え方は、常に概念として理解しにくいものである。だが、このようなことが真実であるのはまちがいない。というのも、金や銀の硬貨が使用されているときであってもそれらが金銀地金の価値で流通することは、ほとんど絶対にはないからである。」(p 70、傍点は原典)

ここまできると、信用貨幣の発生まではあと一息である。ヘンリーとジョシュアの話

を続けよう。

「ヘンリーはジョシュアの好意を受け取りっぱなしにするより、[お返しに]等価値のものを[贈る]約束をすることにする。そこでヘンリーはジョシュアに借用証書を渡す。ジョシュアは、ヘンリーがなにか有用なものを手に入れるまで待って、それから借用証書をヘンリーに戻す。ここでヘンリーが一借用証書を破棄してしまえば、そこで話は終わりになる。だが、ジョシュアが、じぶんでべつのなにかを負って[借りて]いる第三者、たとえばシーラにその借用証書を渡したとしよう。その借用証書は、第三者によって第四者、たとえばローラに対する負債の決済に使用されることもできる。となると、ヘンリーはその額面をローラに負う[借りる]ことになる。かくして貨幣が誕生した。」(p 70)

近世のイギリスでも貴族(地方領主)が振り出した手形、小切手が、転々と裏書きされて貨幣として流通していた例はよく知られている。

「ミッチェル・イネスのような信用論者が主張したのは、かりにヘンリーがジョシュアに紙切れではなく金貨を一枚与えたとしても事態は基本的に変わらないということだ。一枚の金貨とは一枚の金貨と等価値のなにかを支払う約束なのである。つまるところ、一枚の金貨はそれ自体でなにかの役に立つことはない。人がそれを受け入れるのは、他のだれもがそうするであろうと想定しているからだ。

この意味において、通貨単位の価値とは、ある対象物の価値の尺度ではなく、ひとがべつの人間に寄せる<sup>トラス</sup>信頼の尺度なのである。」(p 71)

ここで重要なことは、誰もがヘンリーの借用証書を受け取ってくれることである。信用取引はごく小さなコミュニティでは、自然に発生すると考えられる。例えば村落のなかで約束を違え信義を失うと、村八分にされてしまう。そうなる生活していくことが難しくなるので、生活の維持のために借金を踏み倒すことはしない。だが、取引の範囲が広がり、当事者間の関係性が希薄になれば、踏み倒されるリスクが高くなる。他人に受け取ってもらうためには、信頼を補完する何かが必要になる。ヘンリーは、誰でもいいわけではない。ここでグレーバーは鮮やかにこの問題に答えてみせる。

「しかしもしヘンリーが、かのイングランド王<中略>ヘンリー2世だったら、ほとんど問題は消えてなくなるだろう。」(p 72)

ここで貨幣の特徴がまた一つ明らかになる。貨幣が村落共同体を超えて広域で流通するためには、「皇帝や国王が、当然そこに介入していなければならない。」(p 72)

国家は度量衡を制定するのと同じように、価値の計算尺度(貨幣)も制定する。そし

て歴史学者のクナップは、こうした制度は一旦確立されると長期間持続する傾向があることを指摘している。

その中でも興味深い例はシャルルマーニュ通貨である。彼の帝国はごく短時間で瓦解したにも関わらず、その通貨は元領土地域で「800年以上にもわたって帳簿をつける[勘定する]ために使用されていたことである。これは、一六世紀に、まったく明確なことに『想像貨幣』と呼ばれていた」(p 73) ということである。これはほとんど仮想通貨と同義であろう。仮想通貨は21世紀になって生まれたものではない。すでに歴史に何度も登場しているのである。

### 3. 硬貨鑄造の目的と国民経済の創出

更に第3章は、国家が介入し通貨を創設する理由を探っていく。グレーバーは軍隊を養うには、市場を創設し物資を調達する一方、現金での納税を科すことが、一番手っ取り早い方法であったことを指摘する。そのメカニズムは以下のとおりである。

「ある国王は5万人からなる常備軍を維持したい。〈中略〉軍勢は、駐屯しているあいだに、野営地の10マイル以内でたべられるものならなんでも食い尽くしてしまう。行軍中でなければ、必要な食糧を貯蔵し入手し運搬するためだけに、ほとんど[軍勢と]おなじ数の人間と動物を雇う必要が出てくる。それに対して、兵士たちに硬貨を配布し、ついで、王国内のすべての世帯にその硬貨の一部を王に返すべしと要求するなら、一夜にして国民経済は兵士への物資供給のための巨大機械に転換することになる。」(p 75)

ここでも一般の理解とは逆の見解が提示されている。市場経済は自然発生し、国家の関与は小さいほどよいのではなく、市場が国家によって創設された可能性である。グレーバーは「歴史の記録によれば事実はその(自由主義的想定のこと)正反対であるということだ。国家なき社会は市場ももたない傾向がある。」(p 76)

このあと、第3章は古文書や旧約聖書、古代インドのリグ・ヴェーダ等から負債に関するエピソードを渉猟し、負債の本質に接近していく。だが、そのまともは報告者の手に余る。ご興味を持たれた方は、ぜひ本書に挑戦していただきたい。巻末には訳者あとがきにかえて、訳者らによる各章要約があるので、そちらから先に読むのも一法だろう。

### 4. 仮想通貨とメタル(金銀)の相克

#### 第8章 「信用」対「地金」——そして歴史のサイクル

第8章以下の後半では、いよいよユーラシア大陸の負債と貨幣の5000年史が論じら

れていく。

グレーバーによると貨幣は信用貨幣から始まったが、「信用貨幣が支配的な時代と金銀が支配的になる時代が長期にわたって交互に入れ替わる、という事態が観察される——金銀の時代とは、少なくとも取引の大部分が高価な金属片の手から手への引き渡しによっておこなわれた期間のことである。」(p 322)

そして、硬貨鑄造は紀元前 500 年から前 600 年頃に、中国北部、インドのガンジス河流域、エーゲ海周辺地域でそれぞれ独立して始まった。その理由は戦争である。

「地金が優位になるのは、なによりも暴力の全般化する時代である。それには単純な理由がある。金銀の硬貨は、〈中略〉盗むことができるということだ。」(p 322)

負債は信頼関係であり記録である。これは平時にこそ機能する。それに対し前 500～前 600 年の時代は、中国では戦国時代、ギリシアでは鉄器時代、インドでは前マウリア朝時代で、戦争の時代であった。遠征に出かけた軍隊は占領地の神殿を襲い、金銀の神器を鑄潰して戦利品として持ち帰る。その際、「金銀のインゴットは現代の麻薬密売人たちのスーツケースにつまったまっさらの紙幣と同じ役割を果たしていた」(p 323) という指摘は、説得力がある。

## 第 9 章 枢軸時代 (前 800 年—後 600 年)

枢軸時代という呼び方は、ドイツの哲学者ヤスパースによる。グレーバーは、枢軸時代を紀元前 800 年から紀元後 600 年という比較的な長い時間に再定義した。特に前 6 世紀は、預言者のユダヤ教、仏教、ヒンドゥー教、中国の諸子百家など人類の主要な思想が生まれた時期だが、同時に上記のとおり戦乱と古代帝国が成立していく時代であった。古代大帝国の成立とそれを支える常備軍の存在、そして帝国間の抗争や交易の開始を考えると、枢軸時代がメタルの時代になるのは必然だっただろう。

帝国の成立は、市場経済の大規模化を生む。村落共同体での長い信頼関係よりも希薄な関係の中では、場合によっては一回限りで取引が終わる。そこでは売買される物品の来歴にはこだわらない(盗品であっても売買される)し、なにより利益や収益率が重視されるようになる。哲学を生む時代は、同時に物事を迷信にとらわれずフラットに見る精神も生む時代でもあった。

## 5. 仮想（信用）通貨への回帰

### 第10章 中世（600—1450年）

枢軸時代も終盤となると、古代帝国は各地で衰退期に入り中世が始まる。詳細は省くが、古代帝国を支えていた奴隷制が解体に向かうことが中世を特徴づけている。

古代帝国が崩壊すると、略奪による鑄貨の供給は伸び悩む。一方、社会は相対的な安定期を迎え、遠隔地貿易も継続的に行われるようになる。慢性的な鑄貨不足と信頼に基づく商取引は、信用貨幣を復活させる条件として十分であった。

利用された信用貨幣には、改鑄された貨幣から、割符、皮や釘の代用貨幣、手形や小切手、帳簿への記帳（ツケ）など様々な形態があった。その際の計算単位は、第2節で示したとおり、滅亡した古代帝国の通貨単位が使われることもあった。中世は仮想通貨が主となった時代だったのである。そして教会など宗教的権威が高利貸しを抑制し、債務による拘束（債務不履行による懲役、奴隷労働）を抑制した。

欧州以外でも仮想通貨の利用が増加した。中国では、世界初の紙幣が用いられたことも特筆に値しよう。

この時代の先進地域であったイスラム圏では、ペルシアの神学者ガザーリーが貨幣が貨幣を獲得することに反対し、貨幣の自己増殖を許す有利子貸出を禁じるイスラム教を擁護した。なおイスラム教は利子徴求を禁じたが、マホメット自身商人であったので、商業については肯定的であり、イスラム世界で信用取引の拡大を阻害することはなかったことが明らかにされている。

また科学や古代ギリシアの知識がイスラム圏経由で西欧に伝えられたことは有名だが、イスラム圏は経済分析にも隠れた貢献をしている。グレーバーによると、アダム・スミスが参照した議論や用例の多くが、中世ペルシアで書かれた経済文書に直接に出典を持つものだったという。ガザーリーは、ピン工場で分業を説明しているというから驚く（p 414）。

中世の再評価は様々な分野で行われているが、本書を読むと、貨幣史・金融史も例外でないことがよく分かるだろう。

## 6. メタルへの回帰と資本主義

### 第11章 大資本主義帝国の時代（1450から1971年）

次の時代は大航海時代で幕が上がった。貨幣面では、「仮想通貨と信用経済からの離脱、そして金銀への回帰とともに始まった。」（p 456）

新大陸からもたらされた大量の銀はメタル回帰への加速剤であったが、回帰の直接の

原因は、中世には抑制されていた、巨大帝国、職業的軍隊、大規模な侵略戦争、無制限の高利貸し（中世では教会など宗教的権威が、高利貸しに歯止めをかけていた）などが復活したことである。そして、新時代を特徴づけたことは、資本主義の成立であった。

もともと「資本主義」という言葉を生み出したのは社会主義者達で、定義は「資本を所有する者たちが所有しない者たちの労働を支配するシステム」（p 510）である。同時に資本主義は「継続的で終わりなき成長を必要とするシステム」（p 510）である。

国家が生み出した市場を武力で他地域に拡大し（植民地化）、資本蓄積、経済成長を遂げていく。だが、その際、先住者を負債で縛り、隷属化していく植民地経済の実態をあばくグレーバーの筆は容赦ない。グレーバーは「資本主義はいかなる時点においても『自由な労働』をめぐる組織されたことなどなかったのである。南北アメリカ大陸の征服は大規模な奴隷化とともに始まり、その後、徐々に負債懲役、アフリカ人による奴隷制、『年季奉公制』など、多様な形態に落ち着いていった。」（p 517）と、各地の歴史を紹介していく。古代に成立していた軍事＝通貨＝奴隷制複合体が、近代的な装いで復活した時期が大資本帝国の時代であり、同時に金本位制の時代であったと論じている。

11章は、副題「貨幣と暴力の5000年」の暴力について深く考えさせられる章である。

## 7. 再び信用貨幣の時代へ

### 第12章 いまだ定まらぬなにごとかのはじまり（1971年から今日まで）

1971年のニクソンショックで、国際金本位制は終わりを告げた。米国の国力低下が指摘され、常にドル暴落論が一部で論じられながら、米ドルの優位は一向に変わらない。米ドルが基軸通貨であり続けていることの背景には軍事力があるという見方は否定できない。米国は、「地球上のじぶん以外の国家をすべた合わせた以上の高額の軍事費を出費しつづけている」（p 541）からである。

グレーバーは、信用貨幣への回帰を単純な繰り返しとは考えていない。

「仮想通貨の時代とは、戦争、帝国の構築、奴隷制、負債懲役制度からの離脱でなければならず、かつ地球的規模にわたる債務者保護の制度の構築にむかわねばならないはずである。ところが、わたしたちはこれまで、それとは反対の事態を経験してきた。新しい世界通貨は古い世界通貨以上に、軍事力にしっかりと根づいている。負債懲役制度は、依然、労働をグローバルに徴用する主要原理である。」（p 544）

まったく新しい信用貨幣の時代はまだ始まったばかりである。



## 8. 読書を終えて

本書を読むと、様々なことを問い直すことができる。例えば、2008年のリーマン・ショック。信用・信頼が動揺した当時、信用の補完者足りえたのは、結局国家だけだったことに思い至る。国が預金を全面的に保護することを宣言してはじめて、パニックは終わったからだ。

本書が示すように仮想通貨は昔からあったもので、目新しいものではない。仮想通貨を支えているのは、いつの時代も次の取引で相手が受け取ってくれるだろうという信頼である。この仮想通貨の性質をよく理解すると、最近の仮想通貨ブームの危うさも見える。ビットコインは基本的に国家の支援の枠外にあることを銘記しておく必要がある。金融危機は繰り返しやってくる。ビットコインは次回の危機を生き延びることができるか。

もっとも法定通貨であっても、国家の債務が累積していくと必ずインフレかデフォルトという結末を強いられることも忘れてはならない。ギリシア危機は、決して対岸の火事ではない。

紹介できなかったエピソードはまだまだある。中世の中国における仏寺の経済活動は非常に興味深い。イスラム思想と金利、贈与が原因で上下関係を生まれることを拒絶する先住民の文化など、興味深い話題は尽きない。本書の主たる主張である、そもそも人の社会は負債そのものという考え方にも啓発される。

10cm 近い分厚さの本書は、持ち運びに苦勞はさせられるが、多大な示唆を得られる好著である。広く読まれるべきだ。そして、翻訳に取り組まれた翻訳者、編集部にも敬意を表したい。

本書の販売情報や他の書評は以下のサイトで利用できる。

URL : <http://www.ibunsha.co.jp/0334.html>